

てにおいを嗅ぎ一つ一つ判定し、下手くそな文章には“吐く”“放屁する”などの反応を示し爆笑を誘う場面がでてくる。作文の巧拙が身体の反応を惹起するのも、基本的には身体中枢の心臓が精神活動の根源であり、文章作成の先天的な鍵を握っているという考え方に一脈つながっている。

「陸判」に戻れば、この作品の後半に、心臓交換で味をしめた主人公が今度は妻の醜い顔をとり換えてくれるよう依頼し、陸が執刀するという、やはりグロテスクな場面がでてくる。無論この種の例が、それまでの志怪小説の中にないわけではない。たとえば六朝志怪小説の、尼僧が浴室で自分の腹を裂き、内臓をとり出し手足を切断しているのを覗いてしまった話や、夢の中の人物が顔を交換するよう要請し、承諾したら本当に醜悪な顔に変わってしまった話、冥界から現世に送り返される際、胡人の脚（異臭がする）をつけ換えてもらったばかりに悲喜劇が生じる話などは、おそらく「陸判」の発想やモチーフにヒントを提供したものと思われる。ただそれらのエピソードは、いずれも短篇で、単に怪奇性を強調し倒錯した滑稽さを誘うものの、結局それ以上のものではない。周知の如く『志異』の作者蒲松齡は、若干十九歳で、科挙予備試験たる県・府・院の三試を首席で合格しながら、以後三年に一度行なわれる科挙の地方本試験の郷試に、七十六歳の生涯を閉じるまでついに合格しなかった。晩年には息子と同道してまで済南に受験に出かけたというその執念も、結局実らなかったのである。

江南での足かけ三年ほどの地方幕僚官の時代を除けば、彼は生涯のほとんどを村の塾師として、精神的経済的な苦境にあえぎつつ生きねばならなかった。科挙をめぐるこうした不遇な体験は、「葉生」(1)や「司文郎」(8)の中の悲哀を帯びた登場人物たちの運命によっても代弁されている。しかし、この「陸判」もまた、別の意味で作者蒲松齡の内面を私たちに想像させずにおかない。というのも、真夜中に凄じい形相の冥土の判官

が、黙然と心臓を交換している図は、鬼気迫るものがあるが、それは同時にこの世ならぬ恐怖に満ちた空想の世界にひたるしかすべのない、この作者の不幸な姿をも物語っているのであるから。

注

- (1) 矢沢利彦編訳『中国の医学と技術（イエズス会士書簡集）』解説、一九七七年、平凡社東洋文庫
- (2) 「杜子春伝」の仏教・道教的背景」（加賀博士退官記念中国文史哲学論集）所収、一九七九年、講談社
- (3) 『東洋の科学と技術、数内清先生頌寿記念論文集』所収、一九八二年、同朋舎出版
- (4) 『宋明清小説叢考』所収、一九八二年、研文出版
- (5) “外科”の語、たとえば『夷堅志』は腫物や骨折の治療にあたる医師の場合に使っている。
- (6) 蔣良騷『東華錄』康熙二十一年二月条
- (7) 『太平御覽』395“浴”条所収「幽明録」
- (8) 『太平広記』276所収「幽明録」“賈弼”
- (9) 『太平広記』376所収「幽明録」“士人甲”

（昭和六十年九月十四日受理）

父親のところに連れて行って何度も試してみたが、やはり白痴ではなかった。

蒸し殺しが、白痴から正常な人間に戻るための、逆説的で象徴的な“通過儀礼”であることは言を待たまい。ここでは、外科的な療法というよりも、思いきって童話的な再生にまで変形されている。

再生譚といえど『太平広記』は、巻375から巻386までの12巻をそれにあてており、六朝から唐代まで（厳密には北宋初の『北夢瑣言』まで）の話が収録されている。それらの作品は、奇蹟的な再生行為そのものの不可思議さに目を奪われているか、さもなくば再生を理由づける因果応報の理念の鮮やかな実現を強調するものがほとんどである。ゆえに死亡蘇生に際しての肉体描写もあつさりしており、グロテスクな描写を通じて何かを語ることは稀である。その時代の人人にとって、再生は超自然的な力によってこそ可能であっても、異類による物理的療法なぞ考え及ばなかったことであろう。

「陸判」(2)

しかし何といっても、もともとグロテスクで恐怖に満ちた描写として圧巻なのが、この「陸判」である。話は、文社の連中の間で胆試めしをすることになり、主人公朱爾旦が、十王殿にある恐ろしい形相の判官像を担いでくることになる。ところがそれがきっかけで、朱は一人この冥土の陸判官と、世俗では得られぬような篤い友情を終生結ぶことになる。

ある夜、朱が酔って先に眠ったが、陸はまだ手酌で飲んでいて。ふと朱が夢うつつの中で腹にかすかな痛みを覚えたので、目を開けてみると、陸判官が寝台の前に正座し、朱の腹腔を破り胃腸を取り出して一つ一つ掃除していた。驚いて、「もともと君には何の怨みも

ないはずなのに、どうして殺されるのだ？」と問うと、陸は笑って言った。

「怖がらなくてもいいさ。僕は君のために優秀な心臓に取り換えてやっているだけなのさ」

そして、ゆっくりと胃腸を腔内に収め、元のように縫合し、最後に足を包む布で朱の腰を束ねた。手術が終わり、寝台の上を見ると血の跡もなかった。腹部に少し痺れを感じていた。陸が肉塊を机の上に置いたので、尋ねると次のように答えた。

「これが君の心臓だよ。作文が下手なのは、君の心臓の毛穴が塞がっているからだと思ったから、冥界に行つて幾千万もの心臓の中から優れたのを一つ選んで交換してやったのだ。ここに残しているのは、冥界で足りなくなった数を合わせるためのなのさ」

そして立ちあがり、扉を閉めて出て行った。夜が明け、包帯を解き傷口を見ると、すでに合わさって赤い線が残っているだけであった。それ以来、朱の作文は大いに進歩し、一度読めば忘れないほどになった。

心臓移植は二十世紀の現在でこそ、世界各地で行なわれるようになってものの、勿論蒲松齡の時代にあつては荒唐無稽な空想の産物であった。また右の段で陸判官の言葉に示されている、作文が心臓と密接な相関関係を有するという考え方は、精神の存在機能を身体の中核である心臓に想定した中国の伝統的な認識から生まれている。（ちなみに清の康熙年間、精神は頭脳に局在すると主張した朱方旦は、異端として処刑された⁽⁶⁾）。

「司文郎」(8)は、科挙受験生たちの受験競争に明け暮れる生活ぶりを、悲喜こもごもに描いた作品であるが、その中で一人の医薬を売る盲僧（本当は文章の巧拙を見分ける名人）が登場し、受験生たちの作文を焼かせ

るとブツンと音がした。同じように肘と首のつけ根にもそれぞれ行なった。終わると縛を解き、体を叩いて安臥させた。孜は夜が明けると父母の所にとんできて泣いて言った。

「私は昨夜、以前の自分の行動がまったく道にはずれていたのに思い至りました」父母は大いに喜び、孜もそれ以来処女の如く温和になり、村人たちの尊敬する所となった。

この一段、物語の深層レベルでの解釈を下すなら、狐と人間との子、王孜が団円後も野獸的な異類の性格を拭きできず、そのため両親が柔順な人間として再生させるべく「通過儀礼」としての手術を施した、ということになる。異類婚姻譚におけるこうした結末は『志異』に意外に多い。たとえば「嬰寧」(2)の、笑ってばかりいるおかしな少女嬰寧(実は狐の子)も、王子服と結婚し家庭の中で良妻賢母的な活躍をはじめると従って、次第に笑わない無表情な女に変わってゆく。

また踝、肘、首の三個所に針を打ち刀で拗筋を断つ治療法も、たぶん実際の鍼療法に基づくものというよりは、むしろ物語的なその色が濃い。ただこの記述で思い出されるものに、戦後日本で一時期行なわれた、テンカン患者に対する「ロボトミー」と称する手術(脳の側葉頭の一部を切除し無気力な性格に変える)があるが、蒲松齡もそこまでは予想していなかったに違いあるまい。

「小翠」(7)

話は、白痴の公子、王元豊のもとに、小翠と名のる天真瀾漫な娘(実は天上の玉皇の娘)が来て押しかけ女房となり、人人からバカにされていた公子を優しく慰め、やがて正常に戻った彼を励まし出世させる異類婚姻譚。先述のように『志異』の異類婚姻譚には、身心に障害を持つ主人公が異類に優しく包まれ、やがてその力で栄達や幸福を獲得するス

トリーがよく目につく。またこの作中のヒロイン小翠は、いたずら好きでいつも周囲に笑いと騒ぎをまき起こす可愛い女として実に鮮やかに描かれ、出色のできである。次に掲げるのは、彼女が白痴の夫を予想外の方法で生まれ変わらせる重大な場面である。

ある日、女が浴室にいと、公子が覗いて一緒に入ろうとした。女が笑って押しとどめ、しばらく待つよう諭した。やがて出てくると、熱湯を大がめに注ぎ込み、公子の袍と袴を取り、侍女の助けを借りて公子を大がめに入れた。公子が蒸し暑くなったため大声で叫んで出ようとした。すると、女は許さず蒲団を上にかけてしまった。しばらく経ち、声がしなくなったので、開けて見るともう死んでいた。女は驚きもせずにつこり笑い、公子の死体をひっぱり出しベッドの上に置き、体をきれいに拭いて蒲団をかぶせた。母親が聞きつけ、泣きながら入ってきて罵った。

「気違い女めが、どうして息子を殺してしまったんだい」

女はにつこりして言った。

「こんなバカな子は、いない方がましですわ」

母親はますます怒り狂い、頭からぶつかって行こうとしたが、侍女たちが争って引きとめた。ちょうど騒ぎの際中に、一人の侍女が知らせてきた。

「公子さまが呻いておられます」

母親は泣くのをやめ、公子をさすっていると、息がスースーと通い出し、汗をじっとりかきはじめ寝台の蒲団を濡らすほどであった。しばらくして汗がひくと、公子は目を開け四方を見回し、家中の人を見て不思議そうに言った。

「いままでのことを思い出すと、みんなまるで夢のようだが、どうしたのだろう」母親が彼の言葉づかいが正常なので、大いに驚き、

「夢のように恍惚状態だったが腹がチクチクして痛かった」
破れた個所を見ると、銭のようなかさぶたができ、しばらくしてそれも治った。

乞食が消えた青帝廟の青帝とは、春を司どる神を指し、また春という季節が万物回生の生命溢れる季節であることを考慮すれば、乞食の正体は容易に推測がつく。ゆえに、乞食の痰を飲む↓陳氏が嘔吐する↓新しい心臓が機能する、という過程は、異様なほど丹念でスカトロロジーにのけるクロテスキな描写であるが、一方その描写の深層では意外に神話的物語的モチーフも語られていることになる。

そして主人公が心臓を与えられ蘇生する段の、気持の悪い描写も、伝統的な経脈絡脈を中心とした身体把握に基づくそれではなく、あとで述べることになる「陸判」同様すこぶる解剖学的記述を思わせて興味深い。言うまでもなく中国にあつては、現代でいう外科的手術療法は、後漢の華陀の例を除いてほとんど文献に見当らない。解剖学上の業績でいえば唐末・見素女「五臓六腑図」があるものの、「これは解剖図とはいふものの、内臓に宿る神々を表現した、道教的な色彩の強い図であつて、現代の解剖図という概念からかけ離れた代物」(前記石原明氏)とされる。本格的な解剖図となると、北宋の「欧希範五臓図」や「存真環中図」(楊介)を待たねばならないが、それらとて以後何ら積極的に活用されたふしはない。また北宋仁宗朝に作られたブロンズ製の人体模型も、解剖模型というよりも鍼灸医術用の経路を説明するためのものであつた。中国解剖学の実上の創始者となると、さらに下つて蒲松齡よりの清代中葉の王清任(一七六六—一八三一年)である。彼は一七九七年、涇州福地鎮で精密な解剖所見図を作成し、その著『医林改錯』で詳しい解説を下している(賈得道『中国医学史略』参照、一九七九年、山西人民出版社)。

『志異』の時代では、外科的手術療法は、簡単な皮膚表面の治療を除けば、おそらく現実に行なわれることはなかったであろう。ということ、この作品の、破れた腹腔、立ち昇る熱氣、蠕動する内臓といった人体内部の不気味な描写も、多分に作者の知識と想像に補われたうえで、主人公の再生モチーフを空想的、神話的に語っていることになるう。

「鴉頭」(5)

話は、王文という若者が、ふと知り合つた妓女の鴉頭(実は狐の化身)と愛し合うようになり、幾度かの妨害や試練を越えて結ばれるという異類婚姻譚。この作品も、伝奇的ストーリーとロマンスを兼ね備えた好篇である。

中でとくに注目したいのは、二人の間にできた子供の王孜が、父親のもとで屈強な若者に成長し、やがて狐の一族に幽閉されていた母親の鴉頭を救い出し、一同揃つてハッピーエンドとなつたあと、なお小さなエピソードがこの物語につけ加えられている点である。

団円後、相変らず乱暴な素行が収まらない王孜に対し、両親が次の如き手術を施す。

鴉頭が王文に言った。

「この子には拗筋がありますから、刺してそれを取り出さないことには、いつか人を殺し家を潰すことになりましょう」そこで夜、王孜の眠っているのを窺い、ひそかに手足を縛つてしまった。王孜は気づいて言った。

「私には罪はありません」

母親は、「お前の残酷な性格を治してやるのだから我慢しなさい」と言った。孜は大声で叫び、転がりまわつたがほどけなかった。母親は大きな針で孜の踝(くるぶし)の骨の横を一センチほど刺し、刀でほじく

さえたままナイフを握り、軽快な動きで根元にあてて切りとった。紫色の血が流れ出し寝台を染めた。しかし孔は嬌娜の身体に接近していられるのが嬉しく、苦しくないばかりか、むしろ手術が早く済みいつまでも側にいられないのを恐れた。

ほどなく腐肉が切りとられたが、それは丸丸として樹から削りとったコブのようであった。嬌娜は水を持ってこさせ、切った箇所を洗い、口から弾丸ほどの赤い丸薬を吐き出し、肉の上に置いて転がした。それが一周すると孔は熱いほてりを覚え、さらに一周するとむず痒くなり、三周目で体中がすつきりして骨まで滲み通るほどであった。女は丸薬を喉に収め、「治りました」と言っ、小走りに去っていった。

腐肉の切除と丸薬による消毒(?)という手術過程を、作者は一つ一つ眼前で記録するかのように丹念に描写している。丹念ゆえにいささかグロテスクな印象を与えずにおかない。だがそのグロテスクは、たとえば「頭滾」(4)の頭が転がり落ちる話や、「抽腸」(9)の腸が蛇の如くとぐろを巻いて人間にからみついてくる話のような猟奇趣味のものとは少しく異なる。

右の段は、危篤状態の主人公を嬌娜(狐の化身)が救うという、作品上重要なモチーフを内包しているが、その異類によるメスでの切断、消毒の治療方法が、現代医学の分類での外科的な処置である点に注意を促したい。というのも、中国の臨床の主流は、伝統的に脈診、望診、そして投薬という手順の内科的治療法であり、あとは鍼灸術や占術の類があるものの、右のような外科的処置は例外に近い。先に触れた蒲松齡の『葉崇書』の「外科」の項でも、その意味はどうやら救急医療や婦人病、小児病を除いた人体皮膚表面を中心とした疾患すべてをひっくるめて称しており、「内科」ともう一つ明確な区分が見出せず、その処方も「外科」

でありながらほとんど「飲む」「塗る」「洗う」「張る」等の内科的な療法に終始している。

「嬌娜」の生々しい手術の描写は、一見私たちからはごく現実的な治療方法に映っても、むしろそれは人間ならぬ異類こそが行なうにふさわしい物語的なものであった。

「画皮」(1)

主人公が、浮気心から一人の女を家に連れ帰ったところ、それが幽鬼だと分り、男は逃げようとしたが喰い殺されてしまう。妻(陳氏)は夫の蘇生を道士に依頼するが、道士は自分の手の及ばぬ相手だと断わり、町の乞食に頼みに行くよう指示する。「糞土中に臥し」「道上に狂歌し、鼻涕三尺」という乞食に、陳氏が事情を話すや、この乞食、何を思ったのか彼女を杖で打ったあげく、痰を手に一杯も吐きかけ彼女に食べろと命令する。陳氏は道士の言葉を思い出し、やむなく痰を飲み込むや、乞食は大笑いして立ち去る。あとをつけると青帝廟の中に入り消えてしまった。そして、物語は次の一段で結ばれる。

家に帰った陳氏は、夫の死体を抱き、はみ出た腸を体内に収め処理しながら泣いていたが、泣き声が余りに激しくなり、急に嘔吐を覚えた。胸の中の塊かたまりが突然つきあげ、顔をそむける暇もなく吐き出して死体の上に落とした。驚いて見れば心臓である。死体の中に入っ、てピクピク踊っており、熱気がゆらゆらと立ち昇っていた。不思議なことだと思い、急いで両手で死体の中に閉じ込め、力一杯抱き締めた。少しでも力を弛めると熱気がもうもうと合わせ目から立ち昇るので、絹を裂き急いで縛った。手で死体を撫でていると次第に温かくなってきた。そこで蒲団をかぶせた。真夜中にあけてみると息をしていた。夜が明ける頃にはついに蘇生した。男が言った。

発生するようになったのは、何と言っても十九世紀から以後のことであった。砒素や燐が容易に庶民の手に入るようになったのは、十九世紀中葉以降、つまり、産業革命や工業の発達と関係があった。

すでに毒草園などといった中世紀的なロマンティズムは影をひそめ、犯罪が近代科学と結びつき、大手をふって産業都市のなかを歩きまわりはじめていたのである。(濫澤龍彦『毒薬の手帖』、一九八四年、河出書房新社)

明代に入ると、道士による仙丹追求は、もはや一篇のテーマになりがたく、たとえば『初刻拍案驚奇』(18)「丹客半黍九還、富翁千金一笑」では丹客が金持ちをだます詐欺師として登場し、『二刻拍案驚奇』(18)「甄監生浪吞秘藥、春花婢誤洩風情」では、丹薬作りを指導した方士の玄玄子が、与えた房中薬の事故のため過失致死罪で処分されるという、はなはだ法律優先の現実的な結末で締めくくられている。また馮夢龍編『笑府』(4)「方術部」も、焼丹の道士をドンキホーテとして嘲笑している。

* *

唐代伝奇小説が、道教思想の強い影響下でロマンティズム溢れる物語の世界を開花させた背後には、鍊丹術を中心とした医薬に対する人の神秘感が大きく関与していたに相違ない。しかし、宋代以降、医薬の領域は次第に道教思想の桎梏から解放され、人人にとり医薬は加速度的に身近な存在になっていった。明代の公案小説や笑話から多くを学んだ『志異』も、すでにみたように医療や薬物をテーマやモチーフに組み込む場合、おおむね笑いの対象や皮肉な仕掛けとして用いることが多かった。しかし『志異』の懐みとろの深さは、決して医療薬物を卑小化するだけにとどまらなかったことだ。

そもそも人間の生と死は、文学の永遠のテーマであり、医薬はまぎれもなくその人間の生死を握るものの一つであった。たとえば、『志異』の代表的な再生譚をみるならば、主人公の運命にかかわる場面や作品の主題に鋭く抵触する場面では、医学的にみてすこぶる特徴的な表現が、繰り返し立ち現われることに気づこう。その表現は、以下で検討する如く、荒唐無稽なストーリーとあいまって非現実的な遊びの世界を構築しているようにみえるが、その実、そこには作者の医療に対する悲痛な願望が秘められている場合すらある。以下、そのことを具体的に指摘し分析してみよう。

「嬌娜」(1)

話は、主人公孔雪笠が、荒れ果てた屋敷で狐の一族と知り合い、やがて何度かの試鍊や誤解をくぐり抜け、ヒロインの嬌娜と結ばれる異類婚姻譚。適度な起伏に満ちた筋の運びと、巧みな恋愛心理の描写で、読む者を飄逸たるメルヘンの世界に誘い込む一篇である。中でも注目すべきは、主人公の孔とヒロイン嬌娜が知り合うきっかけとなる場面。たまたま孔が胸に腫れ物を作り死ぬほど苦しんでいた時、狐の一族の中から女医の嬌娜が呼ばれ、起死回生の手術を施すことになる。

女が笑って言った。

「病気になるはずですわ。心脈が動いているのよ。症状は重いけど治ります。ただ皮膚が塊となってしまっていますから、肉をそがねばなりません」

そこで金の腕輪をはずして患部に置き、徐々に押さえた。腫れ物は一寸ばかり浮きあがり腕輪の外にはみ出し、腫れ物の根元の碗ほどの部分がすっぱり腕輪の中に収まってしまった。そこでもう一方の手で上衣の衿を開き、紙より薄い刃のナイフを取り出し、腕輪を押

返しとしての神秘的なロマンティズムが渾然となって含まれていたのである。そのことは別の面からも実証できる。

宮下三郎氏「禁忌と邪視」によれば、六朝から唐代にかけて、薬剤の調合を人に見られてはならないとする禁忌（見られた場合には効能がなくなる）が、かなり広く一般に存在したという。それは衛生上の理由よりも、外界と遮断した密室状態を作り出すことで効能に神秘性を賦与し、自己暗示にかけることを意図したのではないかと思われる。そして宮下氏によれば、宋元以降は、もはやこの種の禁忌が処方箋に記されることはなくなり、タブーといえればせいぜい喰い合わせを指すにとどまる程度になったという。

それに関連して言及するなら、南宋・洪邁編『夷堅志』は次のような興味をそそる話を収める。丙志⁽¹²⁾「舒州刻工」は、「太平聖恵方」という処方箋集の刊行に際し、彫師たちが怠けて手を抜いた仕事をし、字画の誤りや薬の名称や分量の間違いなどを平気で行なっていたところ、突如雷にうたれて死んでしまった話。他でもなく処方箋集という、人命を左右するテキストの刊刻であっただけに、この話が因果応報譚として成り立ちえたのであろう。

同じく丙志⁽¹⁶⁾「異人癰疽方」は、胡某が癰疽の治療を異人から教えられ全快した話であるが、洪邁はその話の末尾に「其れ它の効驗甚だ多く、真に神仙濟世の宝なり」とほめたたえたうえ、洪邁の二人の兄（洪适、洪遵）が新安当塗郡でこの処方箋を刊行した、と申し添えている。

こうした記事から、私たちはすぐれた処方方は神仙にも匹敵し、それは多数の人人に刊行流布されねばならないという考え方を読みとることができよう。（無論この間には宋代に入って急速に進歩した刊本出版術の状況が、そこに介在しているわけであるが）。

石原明氏『漢方』（一九六三年、中央公論社）によれば、宋代になって医学史上もつとも際立った特色は、あらゆる面で国家的要素が強まっ

たことだといわれる。北宋では、古典医書の勅命による校訂とその出版、本草経など医学図書の制定整備、大規模な国定処方箋集の刊行（ちなみに先の「太平聖恵方」百巻も太宗の勅命により淳化年間に完成）、各地の医療施設の開設と国営薬局の付設など、数数の政策が実施された。

『東京夢華録』記す開封汴京の医者町や薬種問屋街の繁盛ぶりも、国家政策により民間の医療体制や医薬品の普及が促進されたことを語っている。宋代では医薬品は次第に道士僧侶や一握りの特権階級の専有物ではなくなりつつあり、医薬知識の普及とともに、それらは都市を中心に広く人人の生活に浸透しつつあった。

宋代の医薬品の大量生産と供給は、薬物の別の側面、すなわち毒物としての面をクローズアップする結果を招く。いわゆる砒素の害である。沢田瑞穂氏「砒霜の禁」によれば、北宋・鄭克「折獄龜鑑」をはじめとして『夷堅志』『元章典』、元雜劇、明代の『三言二拍』などに、砒素などの毒を用いて謀殺する事件記事や小説戯曲がしきりに出ると指摘、わけても『水滸伝』25回（『金瓶梅』5回）の、潘金蓮が愛人の西門慶から砒素を入手し、鎮痛剤と称して夫の武大郎にむりやり飲ませたうえ、馬乗りとなって殺す一段は、「決定的瞬間における女性の冷酷残忍さを抉り出したもので、中国小説中まれに見るリアルな描写」と評される。それまで小説中の女性による殺人といえ、先にあげた「聶隱娘伝」のような木蘭伝説の流れを汲む男まさりの暗殺者^{テロリスト}が一般的な相場であったが、潘金蓮の場合のように日常生活に浸透しつつあった砒素という手段による新しい趣向の殺人は、当時の人人に身近かな恐怖を呼びおこしたことが想像にかたくない。宋代以降のこうした変化は、西欧における次のような状況と対応しているよう。

……毒による殺人の方法が犯罪学的に洗練され、毒殺事件が単に王侯や貴族の周辺で行われるばかりでなく、庶民のあいだでも頻々と

「霍小玉伝」の結末を思い出していただきたい。ヒロイン霍小玉が、男の裏切りを怨みつつ死んだのち、男の方は何故か異常な振る舞いが目立つようになる。ある日、男が帰宅すると妻の盧氏が寝台の上で琴を鳴らしていた。と、急に戸口から小箱が投げ込まれ、中から「発殺符」「驢駒媚」（いずれも媚薬）が出てきた。てっきりこれは浮気の上りしと考えた男は、何も知らぬ妻を折檻し、ついには離縁してしまう。それをきっかけに妄想と嫉妬が男を襲い、やがて生活はすさんで転がるように破滅してゆく。つまりこの作品では、因果応報的な悲劇の結末に対し、房中薬という小道具は導火線のような効果をあげているのである。

これは単に一つの例にすぎないが、しかし『志異』と「霍小玉伝」という両者の比較においてたまたま対照的な使われ方をしていただけの話なのであろうか？

否、その背景には、それぞれの時代が医術や薬物に対して社会的にどのような位置を与えていたのかという問題が、かならずや尾をひいていたに違いない、と私は思う。医術にせよ薬物にせよ、言ってみればそれらは現実世界で常に人間の生死に密接していた分野であり、それらの社会的変動は文学表現にも微妙に波及せずにはおくまい。

* *

周知のように唐代伝奇小説は、道教から有形無形の多くの影響をこうむっていた。不老長寿を求め鍊丹術に没頭する仙人道士は、唐代伝奇の世界の常連であった。そこでは仙丹の追求が一篇の主題となり、あるいは物語の背景や道具として色彩豊かに使われていた。以下その例を駆け足で眺めてみよう。

「杜子春伝」(『太平広記』16、以下『広記』と简称、「続玄怪録」)は、言うまでもなく不老長寿の丹薬作りのため主人公が利用され、過酷な試

練に耐えきれず失敗する話。鍊丹という道教の理想がこの作品の主柱となっていること自明であろう。(なおこの作品の仏教道教的背景については本全徳雄氏に指摘がある。)

「陸顯伝」(『広記』476「宣室志」)は、主人公の体内に住む「消麴虫」なる虫を、胡人がもらいうけて至宝とし、次々と天下の財宝を獲得するという胡人採宝譚。ラストの、海中より宝物を得るべく海辺で「消麴虫」を鼎中で煮るまがましい儀式などは、「杜子春伝」とも共通する道教の秘儀の一端をよく伝えている。

「柳毅伝」(『広記』419「異聞集」)は、ラストがやはり道教の理想を示す。柳毅が、洞庭湖を通りがかった従兄弟の前に現われ、丸薬50粒を与えると、従兄弟は50年後に果たして失踪した、と述べるが、それは秘薬による仙化を意味するのであろう。

「無双伝」(『広記』486)でも物語の大詰め、宮中からヒロイン無双を脱出させるため茅山の道士から入手した秘薬により、仮死状態にさせたのち三日後に蘇生させる、という非常手段が使われている。さらに「聶隱娘伝」(『広記』194「伝奇」)も、やはりラストでヒロイン聶隱娘が、世話になった主人公の遺児の劉縦の前に突如現われ、一粒で一年間災いを防ぐという丸薬を与えて立ち去る場面を設けている。

比較的よく知られているこれらの作品についてのみ考えてみても、そこに道教色の強い神秘的な丹薬作りそのものが、作品の中枢テーマとして、あるいは重要な結末の暗示的道具として登場していることが分ろう。先に触れた「霍小玉伝」の房中薬も、元来この時代にあつては道教思想の中で長寿延命を助けるための有力な便法であった。

『酉陽雜俎』(7)「医」の条は、鍼の名人、インド伝来の不老薬、道士や医師の絶妙な診断などの記事を収めるが、いずれも記録者は大きな驚きをもってそれらを書きとどめている。要するに、唐代の医術薬物に関する記事や物語には、基本的に医薬に対する未知の恐怖の念と、その裏

判で、線香の煙がひきもきらぬ様子だったという（唐代「原化記」の故事）。してみると、天下の事でもかならずしも靈驗をあらわす人間がいる必要はなく、人人が靈驗あらたかだと思えばそこに靈驗が生ずるということだ。

「齊天大聖」(11)の異史氏の言

作者の分身ともいえる「異史氏」は、おおむね一篇の物語から得られた教訓や総括を述べることが多いのであるが、時として右のように、虚構に富んだ物語内容を否定し、それに酔っている読者に冷水を浴びせかける場合もある。

たとえば「邵女」(7)は、妾の邵氏が嫉妬深い正妻に仕え、さまざまな嫌がらせにも耐えながらついに正妻を改心させる話だが、ラストで作者は、正妻が前世の罪過ゆえひどい苦痛に満ちた鍼治療を味わわねばならないという運命を用意し、読者ともども楽しんでおきながら、「異史氏」で次のように読者一般の不意をついてくる。

愚かな夫婦が、一日でも病気になる、さつそく無知な巫を招き、皮膚を刺されたり焼かれたり（鍼灸）、それでも呻き声ひとつあげようとせず耐えているのを見るにつけ、いつも心の中でそれを怪しんでいたものだったが、（前世の罪過とあらば）それで納得がゆくというものだ。

インチキな占トや売薬でひともうけする流しの医者や道士巫女たち、迷信や民間療法に奔走する無知な農民たち、彼らに対する作者の接し方は概して冷徹で啓蒙的である。それは多分に作者が医療薬物に深い知識を有していたことと関連しよう。

事実、蒲松齡はその作「傷寒藥性賦」（路大荒整理『蒲松齡集』文集

『聊齋志異』における医療と再生（岡本）

(1)所収、一九六二年、中華書局）の中で、多種多様な薬物がどのような過程で傷寒を治してゆくかをレトリックを駆使して描写し、知識の一端を披瀝している。また簡便な処方箋集ともいふべき『葉崇書』二巻の編集も、彼の臨床医療に対する深い知識と関心を傍証しよう。

ちなみに最近淄川で発見されたこの『葉崇書』の清抄本を『文献』一九八五年第一、二期（書目文獻出版社）が紹介しているが、それによれば「急救」「内科」「外科」「婦科」「幼科」あわせて258例の処方を書いており、その中には現代医学の常識を超えるようなものも少なくない。たとえば、凍傷や痔疾を治すのに鳩の糞を用い、腋臭（わきが）に対しては小便で洗う、子供の「遊腫」には呪文を唱える、さらに百邪鬼魅にとりつかれた場合には、先の「医療」第二話と同様、首の垢を小豆大にまるめて水で飲む、等に至っては、蒲松齡が『志異』の中で風刺していた民間療法と一体どれくらい差があるのか首をかしげたくなるほどだ。

とはいえ、作者のこうした豊富な医学全般への興味と知識は、『志異』の中にさまざまな形で反映されている。「金陵女子」(3)のラストでは、ニンニクを潰して茅（か）でふいた屋根からしたたる雨水でこね、イボやコブの特効薬を作る方法を開陳しているし、「梅女」(7)ではヒロインが按摩術を施す場面の非常に巧みな描写や、「封三娘」(5)でもヒロインが呼吸法について華陀の五禽図を引用して説明する場面描写などを設けている。

また『志異』に登場する薬物の種類も数多い。葉草、毒藥、麻酔、丹藥、解毒劑、下劑などなど。そして話を医療薬物の面から眺める時、『志異』においてはすでに見たようにおおむね喜劇的な方向で使われてきた。そのことはさわめて示唆的であるように私には思われる。というのも、たとえば房中薬を例にとるならば、同じくそれを物語中の小道具として用いながら唐代伝奇小説「霍小玉伝」では、物語の筋の運びにまったく正反対の効果をもたらしているのであるから。

肉(極上の食事)をそれと知らずに食べ、たちまち死亡した。

これら一連の作品に共通するのは、いずれも『志異』では短篇の部類に属すること、人間の生死をめぐる不条理を皮肉な眼差しで眺めていることである。次にあげるエロティックでコミカルな、薬や医術をめぐる笑話や喜劇的作品も、基底にはやはり皮肉な作者の眼差しを隠しているといつてよい。

「薬僧」(9)は、僧の売っていた房中薬を余分に盗み飲みしたため、男根が肥大して廃人となる男の話。「伏狐」(3)第一話も、狐にとり憑かれた男が、鈴医(流しの医者)のくれた強精剤で逆に女狐を攻め殺してしまふエロティックムーモア。「狐懲淫」(6)第一話は、狐がある男の秘匿していた媚薬をいたずらして妻に飲ませたため、妻が急に欲情をもよおしドタバタ騒動をまき起こす話。第二話は、強精剤となる薬草の根茎を、うっかり来客に酒の肴として出してしまふ笑話。

これらも一様に短篇記事であり、強精剤や房中薬を品のない笑いのタネとして作中で使っている。また比較的まとまりのある物語でも、その種の薬はストーリーに波瀾を起こす仕掛けとして用いられている。

「巧娘」(2)の主人公傳廉は、陰の体裁が蚕の如き不具であったが、ヒロイン巧娘の叔母がくれた薬のおかげで立派な身体に回復する。(ちなみに、身体上精神上で何らかの障害を抱えた主人公が、異類との交友や婚姻を介して癒されてゆく、という民話的なモチーフは、『志異』の中に非常に多い)。「江城」(6)「馬介甫」(6)はともに恐妻を扱う作品で、じゃじゃ馬女房が、不甲斐ない夫を責めて男性改造薬を飲ませたり、自分の悪口を言っていた夫の友人たちに下剤を飲ませて懲らしめるなど、粗筋に起伏をつけるきっかけとして薬が出ている。同じように喜劇的作品「孫生」(6)にも、結婚したものの新妻が肌を許さないため、夫が友人の知恵で麻酔入りの酒を飲ませる一段が設けられている。

蒲松齡の時代にも、制度としての医療機関や各都市の民間薬局も存在するにはしていたであろうが、人口の圧倒的多数を占める農民の間では、マテオ・リッチの言うように誰でも医療行為にたずさわることができた。とりわけ農村で活躍したのが、怪し気な流しの医者、道士僧侶、巫女などであった。彼らは、各地を巡回しながら、農民たちの相談相手となつて医薬品やお札を売り、処方箋や託宣を授ける一方、時にその無知につけ込み詐欺まがいの行為を働くこともしばしばであった。

流しの巫女が、簾の中で何種類もの声色を使い分け、あたかも神の指示により薬を調合しているかのように見せかけて、二セ薬を売る話(「口技」(2))や、やはり流しの巫女が、農民の悩みを聞き一枚の絵を書いて無言の啓示を与える、という「促織」(4)の中の神妙でいくらか滑稽な場面など、彼らの生態の一端を確かによく伝えている。

また占師が幽鬼をあらかじめ派遣しておき、人人を悩ませたのち、自分が取り除いてやると称して荒かせぎする話(「妖術」(1))、占トをおもちゃにしていた男が、罰で病氣となり薬も効かずに悲惨な死に方をする話(「果報」(12))も、占師という存在の持っている怪し気なうさんくささを、かなり増幅した結果である。

昔から思っていたのだが、占いを買うなどとは愚の骨頂である。世間で占トを商売としても生死を当てた者が何人いようか? 占つてはずれれば、占わないのと同じである。またもしかりに私に死期をはっきり教えてくれたところで、それでどうなるというのだろうか? まして人の生死をもてあそび自分の術を誇示するなどは恐ろしいことではないか? 「妖術」(1)の異史氏の言

昔ある士人が寺を通りかかった時、壁に琵琶を描いて立ち去ったが、のち帰路の途中立ち寄ってみると、琵琶の絵が靈驗あらたかだと評

『聊齋志異』における医術と再生

岡本 不二明

『聊齋志異』には、医術や薬物を扱った記事や物語が数多い。この小論では、素材から主題に至るまでさまざまな形で医術や薬物に触れている作品を取り上げ、それが作者蒲松齡とどのような関係にあるかを検討し、従来の『聊齋志異』研究で論及されることのなかった一面に光を当ててみたいと思う。

十六世紀末、中国に入朝した宣教師マテオ・リッチ（中国名利瑪竇）

は、故国への手紙の中で、この国では「病人の治療を行なうことは、だれにも禁じられておらず、望むものはだれであろうと、また知識が豊かであろうと、乏しかろうと、医療にあたる」¹⁾ことができる、と驚きをもつて述べ、中国の医学教育や資格制度の不熟さを指摘したが、そうした事情は、『聊齋志異』の書かれた十七世紀後半に至ってもなお変わらなかった。——以下『聊齋志異』は『志異』と簡称、テキストにはいわゆる三会本、一九六二年、中華書局、一九七八年、上海古籍出版重印、を用する。

たとえば『志異』の「医術」(8)は、マテオ・リッチの言葉をもっとも忠実に裏づけるような作品である。第一話を紹介しよう。

山東省沂水県の張某という貧乏人が、道士から医者になるよう勧められ、魚の齒や蜂の巣を路傍に並べ開業した。ちやうどその頃、青州長官が嗽の病気で苦しんでいたため、管轄の各県に医者差し出すよう命令した。沂水県では後難を恐れて誰も引き受けず、結局この張某がむりや

『聊齋志異』における医術と再生（岡本）

り推挙され青州に送られることになった。時に張も喘息に苦しんでいたが、送られる途中の山奥で、たまたま喉の渇きと痛みを抑えるため野菜のとき汁を飲んだところ、意外にもたちまち治ってしまった。そこで青州長官にも飲ませるとやはり快癒し、彼は一躍名医に祭りあげられる。さらに最後に一つのエピソードがつけ加わる。張が傷寒（腸チフス）に苦しむ患者に、酔っていたため瘧（マラリア）の薬を投与。しかし三日後、患者は盛大なお礼の品を携え再訪してきた、云云。

けがの功名というのか、ヒョウタンから駒というのか、随分でたらめな治療方法でありながらそれが意外な結果を招く悲喜劇を、作者は皮肉な調子をこめて戯画的に描いている。ついでに第二話も紹介しておけば、山東益都の名医、韓翁は、子供が傷寒で死にかけている時、妙案もないまま子供の体を手で揉んでいると、体の垢がこすれて丸薬のように固まったため、窮余の一策とばかりそれを飲ませると、子供は翌日全快していた、という笑話。これらの話をバカげたものと一笑に付するのは簡単であるが、現代でもガンの治療薬のあるワクチンをめぐって、単なる水にすぎないという非難から、特効薬だとする評価まで、大きく揺れ動いている現状を顧みれば、事の本質は今も昔も大差ないのかも知れない。

『志異』からもう少し例をあげてみる。「真生」(10)第二話は、某が砒素の毒を消す秘薬を発明して儲けていたが、偶然ある事件に連坐して入獄することになった。すると義弟が、差し入れの食事にわざと砒素を混ぜ、某が食べたのを見はからって事実を告げた。某は大いに慌て、ひた隠しにしていた秘薬の製造法を義弟に教え、急ぎ作って持つてくるように言いつけた。かくて以後この秘薬の処方次第に世に知られるようになった、云云。

「太医」(9)は、万暦の頃、孫某が一度死にかけた時、太医（皇室御典医）が鍼灸と投薬を施したおかげで蘇生した。その時「熊と虎の肉は食べぬよう」指示された。のち太子誕生を祝う宮中の宴で、孫は熊の掌の